学位論文要旨

日本人英語学習者による英文の容認性判断に影響を及ぼす
サテライトフレーム言語・動詞フレーム言語としての言語特性
－移動構文と結果構文を中心に－

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻　英語文化教育学分野

D140924　平野洋平

目次

謝辞……

図表題目一覧……

第 1 章　序論　1
1.1.　本研究の背景……　1
1.1.1.　理論言語学・第二言語習得研究における知見の導入と学習英文法の見直し……　1
1.1.2.　文型から見る項と付加詞の区別……　2
1.1.3.　第二言語習得研究における項の取り扱い……　4
1.2.　本研究の対象とする英語表現……　6
1.2.1.　移動表現における日英語間の項構造の現れ方の差異……　6
1.2.2.　状態変化表現における日英語間の項構造の現れ方の差異……　10
1.3.　用語の定義と類型論的整理……　14
1.3.1.　移動事象の類型論的整理……　16
1.3.2.　状態変化事象の類型論的整理……　20
1.4.　本論文の構成……　25
注釈……　27

第 2 章　先行研究の概観　30
2.1.　先行研究における検証方法と検証結果の不一致……　30
2.1.1.　着点読みと場所読みの解釈を伴う移動構文の習得研究……　31
2.1.1.1.　Inagaki (2002)……　31
2.1.1.2.　Yotsuya et al. (2014)……　35
2.1.2.　弱い結果構文と強い結果構文の習得研究……　38
2.1.2.1.　Yotsuya et al. (2014)……　38
2.1.2.2.　平野 (2016)……　41
2.1.2.3.　スプリング (2015)……　47
2.2.　検証方法上の限界点……　52
2.2.1.　比較選択の問題……　52
2.2.2.　双極法の抱える問題……　55
2.3.　未検証の課題……　56
2.3.1.　統一的に検証されていない課題……　56
2.3.2.　結果構文の迂言的表現……　58
注釈……　63

第 3 章　実験的検討　64
3.1.　実験参加者……64
3.2.　検証実験……65
3.2.1.　実験の概要……65
3.2.2.　タスクの種類と数……66
3.3.　実験結果……77
3.4.　検証と考察……86
3.4.1.　移動構文に関する課題の検証結果と考察……87
3.4.2.　結果構文に関する課題の検証結果と考察……95
3.4.3.　迂言的表現に関する課題の検証結果と考察……104
3.4.3.1.　移動構文の迂言的表現について……105
3.4.3.2.　結果構文の迂言的表現について……107
3.4.3.3.　英語母語話者による判断……115

第 4 章　結論と今後の展望　120
4.1.　本論文の要約……120
4.1.1.　移動事象・状態変化事象における日英語間の差異……120
4.1.2.　先行研究を補った点……121
4.1.3.　本論文の結論……123
4.1.3.1.　移動構文に対する小課題の結果……123
4.1.3.2.　結果構文に対する小課題の結果……124
4.1.3.3.　迂言的表現に対する小課題の結果……126
4.1.3.4.　研究課題に対する総括……126
4.2.　英語教育への示唆……129
4.3.　第二言語習得研究の展望……133
4.3.1.　使役移動構文の習得……133
4.3.1.1.　位置づけ……133
4.3.1.2.　アスペクト仮説に基づく検証……136
4.3.2.　受動構文の習得との比較……138

参考文献……142

Appendix 1　タスクの説明と練習課題……149
Appendix 2　移動表現のタスクに使用したテスト文とイラスト……157
Appendix 3　状態変化表現のタスクに使用したテスト文とイラスト……185
Appendix 4　授受構文のタスクに使用したテスト文とイラスト……214
Appendix 5　計算問題のタスク……225

本論文は、日本語を母語とする英語学習者（以下、JLE (Japanese Learners of English)）を対象に移動や状態変化を表す英語表現に対する容認性を検証したものである。本論文は全 4 章から構成される。第 1 章では、移動表現と状態変化表現における日本語と英語（以下、日英語）の間で成立する表現の違いを確認し、それを Talmy (2000) の提唱する言語類型論に基づく観点から整理した。第 2 章では、JLE を対象に英語の移動表現や状態変化表現の習得を取り扱った先行研究を概観した上で、本研究の研究課題を示した。第 3 章では、本研究の実験内容を説明し、実験結果を示した上で、検証結果に考察を加えた。第 4 章では、本論文を総括し、結論を示した。最後に、英語教育と第二言語習得（以下、SLA (Second Language Acquisition)）研究の観点から、今後の課題と展望を示して本論文を締め括った。

第 1 章　序論

第 1 章では、移動事象を表す移動構文と状態変化事象を表す結果構文において、日英語間で成立する構文のタイプの差異に類似性があることを概観した。移動構文では、英語が「有方向移動動詞」も「移動様態動詞」も到着点を表す句を項構造に取ることができる一方で、日本語は「有方向移動動詞」しか到着点を表す句を項構造に取ることができない。結果構文では、英語が「状態変化動詞」も「働きかけ動詞」も結果を表す句（以下、結果述語）を項構造に取ることができる一方で、日本語は「状態変化動詞」しか結果述語を項構造に取ることができない。このような日英語間の差異を Talmy (2000) の言語類型論に基づく観点から整理し、英語は各事象を構成する「中核的スキーマ」－移動事象の「経路」や状態変化事象の「推移」－が主動詞以外の要素（＝サテライト）によって表されやすく、日本語はそれが主動詞によって表されやすいことを概観した。また、中核的スキーマを表す英語表現に明示的な表現と非明示的な表現があることを見た。「経路」については、「着点句」が明示的で、「場所句」が非明示的な表現であった。「推移」については、「前置詞句」型の結果述語が明示的で、「形容詞句」型の結果述語が非明示的な表現であった。いずれも、“to” という音形を含む前置詞が明示的な役割を果たしていることを確認した。

第 2 章　先行研究の概観

第 2 章では、JLE を対象に英語の移動構文や結果構文の習得を取り扱った先行研究を概観し、大きく 3 つの点に言及した。1 点目に、先行研究の間で類似の研究課題に対して検証結果が一致していないものを概観し、その不一致が検証方法の違いやそれによって測られているものの違いに起因することに言及した。その際、各先行研究における検証方法上の限界点を指摘した。2 点目に、先行研究におけるその他の検証方法上の限界点に言及した。3 点目に、先行研究では統一的に検証されていない課題があることに言及した。

1 点目については、まず、JLE による「様態＋場所句」型の移動構文の習得を取り扱った先行研究として、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) を概観した。その次に、JLE による「弱い結果構文」と「強い結果構文」の習得を取り扱った先行研究として、Yotsuya et al. (2014)、平野 (2016)、スプリング (2015) を概観した。

移動構文の習得に関する先行研究を概観した際には、Inagaki (2002) の検証方法上の限界点として、実験参加者に対して 2 枚のイラストを同時に提示することに伴い、その 2 枚のイラストの間で優劣の判断がついてしまう可能性が残留する点を指摘した。また、Yotsuya et al. (2014) の検証方法上の限界点として、実験に採用された「真偽値判断タスク」では、参加者がテスト文を適切なものであると感じている程度差が測られておらず、ある程度適切だと判断した場合にも True という回答を選択することで、回答に過剰な偏りが出てしまう可能性を指摘した。

結果構文の習得に関する先行研究を概観した際は、まず、Yotsuya et al. (2014) で採用されている「真偽値判断タスク」と「容認性判断タスク」に対して、それぞれ以下の限界点を指摘した。前者については、上述のとおり回答に偏りが出てしまう可能性に加え、このタスクで確認できるのが、結果構文を知っているかどうかというよりは、結果述語が叙述するものが直接目的語でなければならないことに関する知識に過ぎない点を指摘した。後者については、テスト文が文脈に当てはまるかどうかを判断するタスクになっており、テスト文が文法的に正しい文として提示されているために文法性や表現としての自然さを測っているとは言いがたい点を指摘した。次に、平野 (2016) とスプリング (2015) の検証方

法上の限界点として、主に、テスト文の分類に不備があることを指摘した。平野（2016）の実験は、動詞の性質に着目し、結果構文を「弱い結果構文」と「強い結果構文」に分類した上で、JLE による結果構文に対する容認性を検証するものであった。しかし、結果述語の統語範疇（形容詞句か前置詞句か）に配慮した分類になっていないために、「弱い結果構文」には形容詞句型と前置詞句型の双方が同程度含まれていたのに対して、「強い結果構文」はそのほとんどが形容詞句型になってしまっていた。これにより、動詞の特性による影響を測った実験とは言いがたい点を指摘した。スプリング（2015）の実験では、「サテライトフレーム文（変化を前置詞句で表す）」として分類されるテスト文の中に、状態変化動詞が動詞として用いられているものがあるために、そのテスト文が変化（推移）を必ずしも「サテライト（この場合は前置詞）」で表しているものとは言い切れない点を指摘した。

2 点目として、その他の検証方法上の限界点として、「比較選択の問題」と「双極法の抱える問題」に言及した。比較選択の問題は、実験参加者に複数のテスト文やイラストを同時に提示することに伴い、テスト文同士やイラスト同士での優劣の判断がついてしまうことで、1 つ 1 つのテスト文の容認性やテスト文が表す状況に対する判断が正確になされていない可能性が残留するというものであった。イラストについてこの問題を抱える先行研究として、Inagaki（2002）の存在を上で指摘したが、ここではテスト文についてこの問題を抱える先行研究として、平野（2016）、スプリング（2015）に加え、Inagaki (2001）を取り上げた。また、その際に、移動構文の迂言的表現に対する JLE の容認性判断の結果を概観した。次に、双極法の抱える問題として 2 つの点を指摘した。1 つ目は、5 件法ないしは 7 件法における真ん中の 0 が意味するものが曖昧な点であり、2 つ目は、正の数側の回答項目と負の数側の回答項目の内、意味的に重複している内容のものが含まれている点であった。平野（2016）と Inagaki (2001）がこの問題を抱えていることを指摘した。

3 点目については、まず、JLE による英語移動構文の習得を取り扱った研究では、「様態＋着点句」型の移動構文と「様態＋場所句」型の移動構文に対して、それぞれ異なる検証方法が採用されてきたことを指摘した。次に、JLE による英語結果構文の習得を取り扱った研究では、テスト文の分類上の不備があることを改めて指摘した。さらに、移動構文と

結果構文が日英語間の類型論的差異を表す顕著な構文として議論されてきたにもかかわらず、JLE によるこれら両構文の習得を統一的な手法で検証した先行研究が見られない点を指摘した。また、両構文の迂言的表現を含めた検証実験にすることで、これまで移動構文の迂言的表現の習得についてなされてきた議論を再検討するだけでなく、同様の議論を結果構文の迂言的表現の習得に適用できるかについて検証することや、双方の迂言的表現に対する判断を対照させた議論をすることが可能になることを指摘した。ここまでの議論を踏まえ、本研究の研究課題とそれに応えるために取り組む 5 つの小課題を提示した。

【研究課題】英語の移動表現・状態変化表現に対する JLE の容認性判断は、日英語間の動詞フレーム言語・サテライトフレーム言語としての特性の差異に影響を受けるか。また、受けるとすれば、具体的にどのような特性に影響を受けるか。

【小課題 1】JLE は、着点読みの解釈を伴う英語移動構文として、「様態＋着点句」型と「様態＋場所句」型のどちらの英語表現を容認しやすいか。

【小課題 2】JLE は、「様態＋場所句」型の英語移動構文に対して、「着点読み」と「場所読み」のどちらの解釈を容認しやすいか。

【小課題 3】JLE は、英語結果構文の内、「弱い結果構文」と「強い結果構文」のどちらを容認しやすいか。

【小課題 4】JLE は、英語結果構文の内、「形容詞句」型の結果構文と「前置詞句」型の結果構文のどちらを容認しやすいか。

【小課題 5】JLE は、英語移動構文と英語結果構文のそれぞれの迂言的表現をどの程度容認するか。

【小課題 5-(i)】　JLE が英語移動構文の迂言的表現をどの程度容認するか。

【小課題 5-(ii)】　JLE が英語結果構文の迂言的表現をどの程度容認するか。

第 3 章　実験的検討

本研究は、検証実験に、2 枚 1 組のイラストを用いた「容認性判断タスク」を採用した。第 3 章では、まず、この実験の内容を説明し、実験結果を提示した。その際、この実験が

先行研究の抱える「比較選択の問題」と「双極法の抱える問題」を改善している点に言及した。また、先行研究におけるテスト文の分類上の不備や統一的に扱われてこなかった英語表現の存在を踏まえ、JLE による英語の移動表現と状態変化表現に対する容認性を統一的に検証している点に言及した。これに続き、この実験の結果を基に分析した各小課題に対する検証結果を提示した上で、「移動構文に関する課題（小課題 1・2)」、「結果構文に関する課題（小課題 3・4)」、「迂言的表現に関する課題（小課題 5)」の順に考察を加えた。

小課題 1・2 については、JLE が、着点読みを伴う移動構文として、「様態＋着点句」型を「様態＋場所句」型よりも容認しやすく、「様態＋場所句」型の移動構文に対して、「場所読み」を「着点読み」よりも容認しやすいという結果になった。英語は移動様態動詞が到着点を表す句を項構造に取ることができる一方で、日本語はそれができない。こうした日英語間の項構造の現れ方の差異という観点から見ると、JLE は着点読みを伴う移動構文として、移動様態動詞が主動詞に用いられた英語移動構文を習得しそこなう可能性がある。しかし、本研究の検証により、JLE は主動詞に移動様態動詞が用いられた英語移動構文をある程度容認できることが示された。さらに、このような英語移動構文に対して、JLE が一様の反応を示すわけではなく、JLE にとって容認することが比較的容易な表現とそうでない表現があることが明らかとなった。JLE は、移動の「経路」が、to, into, onto の “to” という音形によって明示的に示される場合に「経路」の概念を認めやすく、そうでない場合には「経路」の概念を認めにくいことが明らかとなった。なお、小課題 2 は、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) の間で検証結果が異なるものであった。JLE が「様態＋場所句」型の移動構文に対して、「着点読み」と「場所読み」の解釈をそれぞれどの程度容認するのかという点については、先行研究の検証結果からは推測することしかできなかった。本研究の検証結果を双方の先行研究の検証結果と照らし合わせることにより、程度差を示しながら JLE が「場所読み」の解釈をより容認しやすいことを明らかにすることができた。

小課題 3・4 については、JLE が、「弱い結果構文」を「強い結果構文」よりも容認しやすく、「前置詞句」型の結果構文を「形容詞句」型の結果構文よりも比較的容認しやすいという結果になった。これらの結果から、JLE が英語の結果構文を容認する上で、主動詞が

状態変化の「推移」を含意するかどうか、ならびに、結果述語が明示的に「推移」を表すかどうかに影響を受けることが示された。これにより、JLE は日本語で成立するような項構造の現れ方をする英語の状態変化表現を容認しやすいことが明らかになった。また、日英語の双方で成立するような項構造の現れ方をする英語の状態変化表現にも、日本語では成立しない項構造の現れ方を持つ英語の状態変化表現にも、学習者にとって習得の比較的容易な表現とそうでない表現があることが明らかになった。JLE は、状態変化の「推移」が to, into の “to” という音形によって明示的に示される場合に、そうでない場合よりも、「推移」の概念を認めやすいことが明らかとなった。移動表現と状態変化表現に対する JLE の容認度を統一された検証方法で検証し、「経路」と「推移」に対して JLE が類似の反応を示すという結果が得られたことは、興味深い知見を提供できたものと考える。

なお、小課題 3 は、Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) の間で検証結果が異なるものであった。本研究の検証結果を Yotsuya et al. (2104) の検証結果と照らし合わせることにより、程度差を示しながら JLE が「弱い結果構文」を「強い結果構文」よりも容認しやすいことを明らかにすることができた。また、小課題 4 について、本研究の検証結果を平野 (2016) やスプリング (2015) の検証結果を照らし合わせることで、非明示的に「推移」を表す形容詞句型の結果述語を JLE が自然な表現として容認する上で、英語を専攻することによる影響を受ける可能性が示された。また、本研究の実験群を学年別に分類した検証を施すことで、学習期間の長さが影響を及ぼす可能性が示された。さらに、学習期間の長さによる影響が、非明示的に移動の「経路」を表す「様態＋場所句」型の移動構文でも確認されたことにより、中核的スキーマが非明示的に表された表現を徐々に容認できるようになるという点において、JLE による英語の移動表現と状態変化表現の容認度判断にある一定の類似性が存在する可能性が示された。

小課題 5 については、JLE が、英語母語話者 (以下、NSE (Native Speakers of English)) よりもはるかに高い度合いで、移動構文と結果構文双方の迂言的表現を容認する結果となった。とりわけ、本研究における移動構文の迂言的表現に対する JLE の判断結果は、Inagaki (2001) における結果に極めて近いものであった。英語力の違いや学習期間の長さにかかわ

らず、JLE が移動構文の迂言的表現を過剰に容認することが示されたという点において、JLE が迂言的表現内の and や by -ing を日本語の「～て（で）」形の表現に相当するものとみなしているという Inagaki（2001）の指摘を強く支持する結果となった。また同様に、英語力の違いや学習期間の長さに関係なく、JLE が結果構文の迂言的表現を過剰に容認したことからも、日本語（の特性）を基にした判断をしている可能性が示唆された。日本語を基にした判断については、Inagaki（2001）の指摘と併せて考察し、英語の使役動詞を日本語の「－さす／させる」に相当するものとみなしている可能性を指摘した。さらには、英語力や学習期間の差異に関係なく、こうした母語の特性に影響を受けた判断が継続される可能性が高いという点において、学習者に対して否定証拠を提示する必要性、またその方法が求められる結果となった。

第 4 章　結論と今後の展望

第 4 章では、本論文を総括し、結論を示した。まず、各小課題の検証結果から「英語の移動表現・状態変化表現に対する JLE の容認性判断は、日英語間の動詞フレーム言語・サテライトフレーム言語としての特性の差異に影響を受ける」と結論付けた。また、日英語間の特性の差異の内、「JLE は『中核的スキーマが明示的にも非明示的にも表出されうる』という英語の特性と『移動事象や状態変化事象の中核的スキーマを動詞で表しやすい』という日本語の特性に影響を受けやすい」と結論付けた。その上で、これらの影響は、学習者が受けるインプットにより、前者が比較的変化しやすく、後者は比較的変化しにくいと考えられることについて述べた。

まず、小課題 1・2・4 の結果から、移動の到着点を表す句としても状態変化の結果を表す句としても、JLE が「経路」や「推移」を明示的に示した表現を容認しやすいことが明らかとなった。しかし、これらを非明示的に表す「様態＋場所句」型（着点読み）の移動構文や形容詞句型の（強い）結果構文も、肯定証拠に含まれる以上、学習者は徐々にこれらの英語表現を自然なものとして受け入れるようになる可能性がある。ただし、学習時期の比較的早い段階からインプットに含まれていると考えられる移動構文でさえ、到着点の

表し方による影響が、英語の学習を大学まで続けている者に及ぶことが明らかとなった。結果構文は、移動構文より遅い時期に JLE が触れ始めると思われるだけでなく、Snyder (2001) において、NSE でさえ使用し始める時期が比較的遅く、使用する頻度も高くないことが指摘されている。このことからも、インプット量に頼るだけでは、学習者が英語結果構文を自然な表現として容認できるようになるにはかなりの時間を要するかもしれない。

また、小課題 3・5 の結果から、JLE が「経路」や「推移」を含意する動詞が主動詞に用いられた英語表現を容認しやすいことが明らかとなった。JLE が比較的早い時期から触れている移動構文を基にした迂言的表現であれ、移動構文より触れ始めるのが遅く、触れる頻度が低いと考えられる結果構文を基にした迂言的表現であれ、その双方を JLE が過剰に容認するという結果を示したことから、JLE は、NSE にとって自然な英語表現に触れることー肯定証拠だけをインプットとして取り入れることーだけでは、NSE にとって不自然な表現を不自然な表現として受け止められるように必ずしもなるわけではないことが明らかとなった。また、このような母語の特性は、JLE の英語力や学習期間の差にほとんど関係なく、影響を及ぼし続ける可能性が高いことが改めて示された。これらの迂言的表現が NSE にとって不自然な表現であることは、当然肯定証拠からは得られる情報ではなく、否定証拠として提供されることが無ければ、学習者はそのことに気付きにくいものと思われる。もちろん、NSE にとってはこのような迂言的表現が不自然な表現であることから、学習者が実際にこのような表現に触れることは少ないかも知れない。しかし、学習者が産出する英文の中に、母語の影響を受けることにより、こうした不自然な表現が含まれてしまう可能性が残留することは否めないものと考えられる。

これらの結論を踏まえ、英語教育と SLA 研究の観点から、今後の課題と展望を示した。まず、英語教育において、英語にはない日本語の特性の 1 つである「複合動詞」を活用した学習や、英語の形容詞に相当する単一の統語範疇が日本語にはないことを意識した学習を取り入れる提案をした。それに続き、SLA 研究において、「使役移動構文」と「受動構文」を交えた研究の方向性をそれぞれ示して本論文を締め括った。